新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生による指導・助言

～中学校編～

県教育庁義務教育課

英語教育実践リーダーが指導をいただいている先生方

- ○ 金森 強 先生（文教大学）
- ○ 太田 洋 先生（東京家政大学）
- ○ 酒井 英樹 先生（信州大学）
- ○ 町田 智久 先生（国際教養大学）
- ○ 阿野 幸一 先生（文教大学）
- ○ 佐藤 博晴 先生（山形大学）
- ○ 髙橋 一幸 先生（神奈川大学）
- ○ 阿部フォード 恵子 先生（CALAインターナショナル）

　英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

　指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

<テーマ1>

単元づくりについて

目指す生徒の姿を具体的に①

　単元の言語活動における具体的な生徒の発話例を、「A評価の例」「B評価の例」として事前に書いてみるとよいでしょう。

→　評価基準が明確になります。

目指す生徒の姿を具体的に②

本時の目標に対しても、生徒のA基準の姿、B基準の姿を具体的にしましょう。また、B基準に到達しない生徒への支援も具体的に考えましょう。

単元づくりについて

「形」と「内容」のバランスを

語句や文法等の「正確さ」に焦点を当てた授業、
間違いを恐れずに相手と伝え合うことを大切にする
「意味内容」に焦点を当てた授業、どちらも必要なこと
です。年間、単元を見通してバランスよく指導して
いきましょう。

<テーマ2>

言語活動について

言語活動について

生徒が思考・判断する工夫

　使う表現を提示するのではなく、生徒に考えさせるようにします。例えば、「I would like ○○.」を使うように示すのではなく、「注文する」という場面を確認します。その中で、どのような表現を使えばよいかを生徒が考えることが大切です。

言語活動について

目的、場面、状況を明確に

　例えば、「自己紹介をする」というのは目的ではなく「場面」です。「自己紹介で、自分や相手の新たな一面を知り合う」など、「目的」のある言語活動が生徒の主体性を高めることにつながります。

<テーマ3>

中間指導について

中間指導について

中間指導の焦点化

本時で「英語の正確さ」と「表現内容」のどちらに指導の焦点を当てるのかを明確にしたうえで、焦点に沿った中間指導の声がけを行い、生徒に考えさせて気付かせるのがよいでしょう。

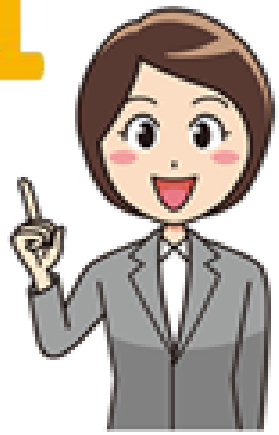
中間指導について

書く活動の中間指導例

　語だけで文で書けないなど、困ったり間違ったりしたものを共有します。それを、他の英文と比較するなどして、どう書けばよいか生徒に考えさせます。比べる時間が、生徒の再思考を促します。

<テーマ4>

Small Talkについて



Small Talkについて

内容を重視する

Small Talkが、文法や型が優先されている傾向にあります。発話の内容を重視しながら、文脈の中で、言語材料や使用場面に気付かせることが大切です。

＜テーマ5＞

教科書の活用について

教科書の活用について

「読むこと」の領域では

「読むこと」の領域は、「必要な情報」「概要」「要点」を捉える力の育成を目指します。さらに、これらの力を教科書だけでなく、初見の英文を読んで発揮できることが大切です。

教科書の活用について

教科書本文の読解では

教科書本文の意味の100%理解を目指すのではなく、「必要な情報」「概要」「要点」を捉えるための読解を行いましょう。

（『NEW HORIZON』Read and Thinkの例）

Round 1：20～30%の理解度

Round 2：50～60%の理解度

Round 3：80～90%の理解度　のイメージで

教科書の活用について

教科書内容の導入では

語彙や題材が難しくなっているので、易しい英語で具体的に言い換えるなど、丁寧な配慮をすると生徒の理解が深まります。導入の途中で生徒に質問するなどして、理解できているか確認してみるとよいでしょう。

教科書の活用について

題材への関心を高めるための工夫

　教科書本文についての質問に加えて、「題材の内容に対して自分はどう考えるか」など、題材を生徒に引き寄せる導入を行うとよいでしょう。自分の考えを言うときは、まず教師がモデルとして話し、生徒が自分の考えを加えて表現してみるなど、ステップを踏んで自己表現につなげるとよいでしょう。

<テーマ6>

言語習得について

言語習得について

文脈の中でInputを

文脈の中で新出表現などの「形」と「使用場面」と「意味」に気付いたとき、Intakeになり、Outputにつながります。

言語習得について

言語材料や文法事項の導入は

使用場面と切り離すのではなく、例えば、生徒とのやり取りの中に新出表現を入れ、生徒自身がその意味や形、使用場面に気付けるようにしていきましょう。

言語習得について

表現の意味を確認するときは

「How many ・・・？」や「What do you want …？」などの意味を児童と確認する際は、「いくつ？」「何が欲しい？」と直訳的に指導するのではなく、「数を尋ねる表現だね」「欲しいものを尋ねる表現だね」などと指導することで、表現の意味を汎用的に捉える力につながります。

<テーマ7>

ALTとの授業について

ALTとの授業について

生徒の発話内容を大切に

　ALTには、生徒が話した英語の「正確さ」より、話した「内容」を大切にして、コミュニケーションを行ったり、価値付けてもらいましょう。

ALTとの授業について

英語でのコミュニケーションのために

　ALTが活動等の指示を行うとき、指導者は日本語で補足せずに任せるようにします。ALTに指示の数を制限してもらったり、易しい英語に言い直したり、ジェスチャーを入れてもらったりして、生徒が自分で英語を理解できるような支援をしていきましょう。

他にも…

他にも…

新出語句の指導は

○ 一度に全てを定着させようとせず、繰り返し扱う中で、定着を促していきましょう。

○ 本文と切り離して指導するのではなく、本文の内容を踏まえながら指導するとよいでしょう。

他にも…

書くことを急がない

　いきなり書かせるのではなく、あくまでも音声で慣れ親しみ、聞いて言えるようになったことを書くイメージが大切です。「あの表現はこう書くのか」といった想起が、定着につながっていきます。

　書く活動では、「相手」を意識させることが必要です。